

村上俊治物語

The story of Toshiharu Murakami



特集 焼き鳥いちばん開業秘話

～夢見た串うち人生、得たつながり～

インタビュー 「面白きこともなき世を面白く」



目次	02 人物紹介 村上俊治
	03 家系図
	04 特別掲載 村上俊治 年表
	06 生い立ち
	07 村上俊治物語
	14 コラム 家族から見た村上俊治
	15 思い出
	16 インタビュー 「面白きこともなき世を面白く」
	18 残したいこと
	20 家族から

プロフィール

名 前

村上 俊治（むらかみ としはる）
ニックネーム：としちゃん

出身・誕生日

静岡県裾野市佐野
1947（昭和 22）年 9 月 30 日

学歴

沼津市立沼津高校 卒業

仕事

関東自動車工業株式会社（現トヨタ自動車東日本）
自営業（焼き鳥いちばん）

趣味

旅行、読書、庭いじり

好きな食べ物

寿司

好きなもの

西部劇、時代劇、ミステリー小説

尊敬する人

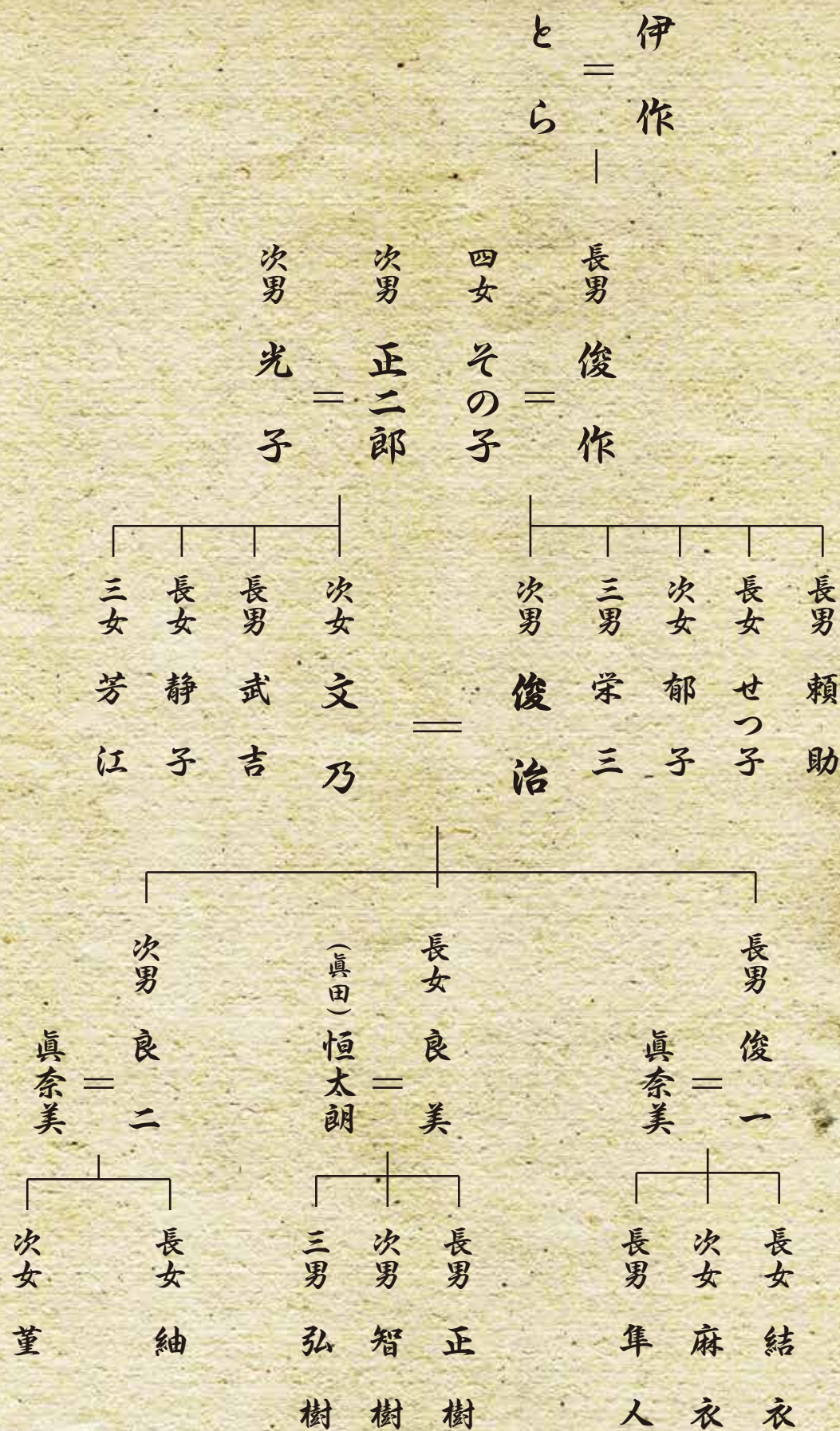
吉田松陰、高杉晋作

座右の銘

面白き
こともなき世を
面白く



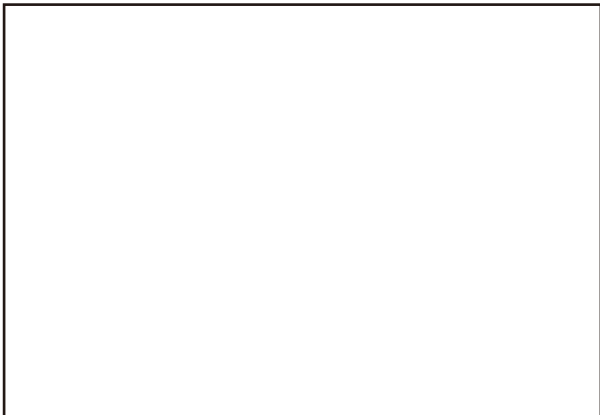
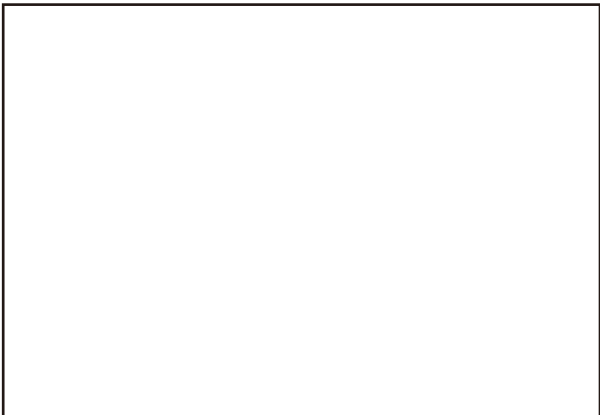
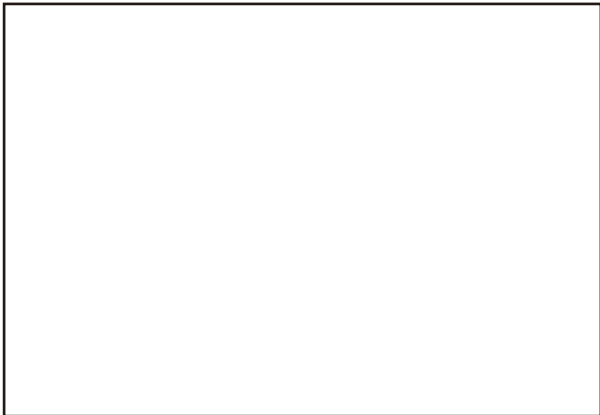
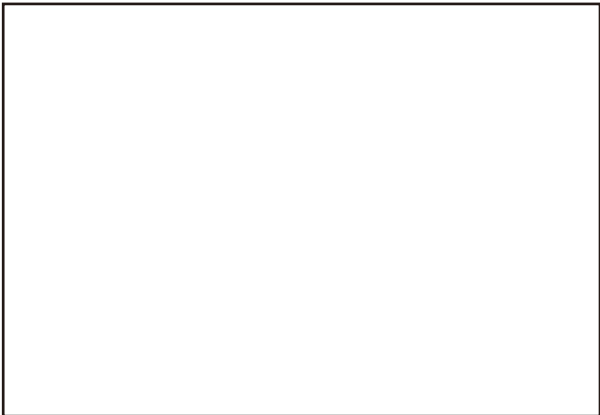
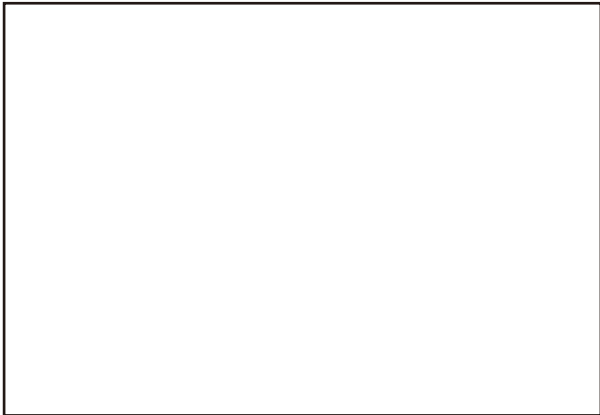
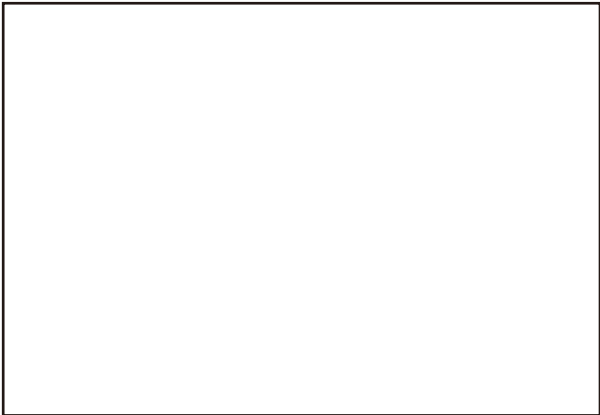
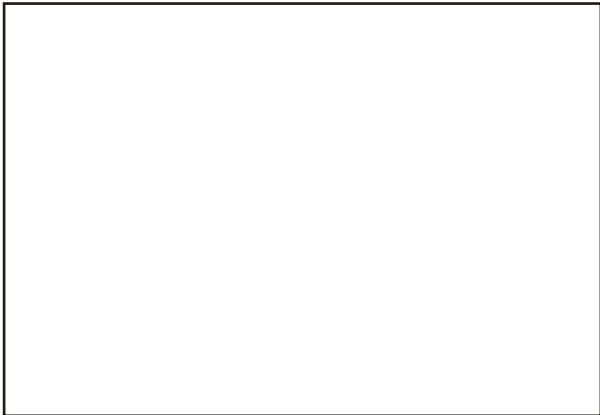
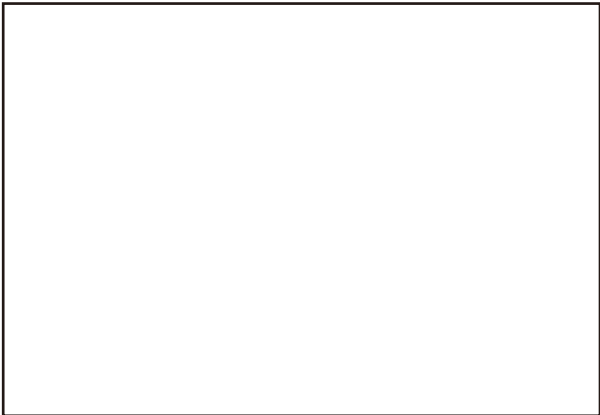
村上家系図



年表と写真で振り返る

1947年	0歳	9月30日、裾野市佐野にて誕生。
1965年	18歳	沼津市立沼津高校を卒業。関東自動車工業株式会社入社。
1969年	22歳	文乃と結婚。二人三脚の人生がスタートする。
1971年	24歳	長男・俊一 誕生。父親としての自覚が芽生える。
1973年	26歳	長女・良美 誕生。家族の笑顔がさらに増える。
1977年	30歳	次男・良二 誕生。三人の子宝に恵まれる。
1980年	33歳	佐野に念願のマイホームを新築。
1997年	50歳	早期退職。長年の夢であった「焼き鳥いちばん」を開業。
2018年	71歳	喉頭がんを発症。家族の支えの闘病生活。
2020年	73歳	懸命な治療の結果、一度目の完快。店に復帰。
2021年	74歳	がんが再発。再び困難に立ち向かう。
2022年	75歳	喉頭一部摘出手術を受ける。かろうじて声は残る。
2026年	78歳	身体を労わりながら、元気にお店も営業中。

村上俊治の歩んできた道



村上俊治物語①

富士の麓に刻まれた、はじまりの記憶



静岡県裾野市佐野。

仰げばいつもそこにある富士の山容と、箱根の山裾から昇る朝日。

豊かな自然と家族の愛情に包まれ、

村上家の四番目、次男として歩み始めた俊治。

その「ものがたり」の原点となる、

希望に満ちた日々を迎える。

幼少期～今とは違う佐野の風景～

——村上さんは昭和 22 年、裾野市佐野のお生まれですね。当時は今とはずいぶん景色が違ったのではないのでしょうか。

村上：

ええ、それはもう全くの別世界ですよ。今の裾野しか知らない人が見たら、どこか遠くの山奥に迷い込んだと思うんじゃないかな（笑）。道という道はほとんどが未舗装の砂利道でね。車なんて滅多に通らないから、道そのものが子供たちの遊び場でした。雨が降れば泥んこになるし、晴れば埃が舞う。でも、それが当たり前の景色だったんです。一番の思い出は、やっぱり黄瀬川ですね。今の黄瀬川は護岸工事もしっかりされていますが、当時はもっと荒々しくて、自然そのものの姿をしてい

ました。川岸にコンクリートなんて一枚もなく、大きな岩がゴロゴロ転がっていてね。夏になれば、朝から晩まで川にいました。

——川ではどんなことをして遊んでいたのですか？

村上：

一番の自慢は「飛び込み」ですよ。川の深いところにある大きな岩を「飛び込み台」に見立ててね。誰が一番高く、かっこよく飛べるかを競うんです。黄瀬川の水は富士山の伏流水も混じっているから、夏でもキンと冷たい。その冷たさに肌を刺されながらドボンと飛び込む快感は、今でも体に染み付いています。

遊び道具なんて、何もいりませんでした。川の流れそのものが遊び相手で、潜って魚を探したり、流れの速いところで「川流れ」をしたり。自然の中で自分の体の動かし方を学んだような気がしますね。

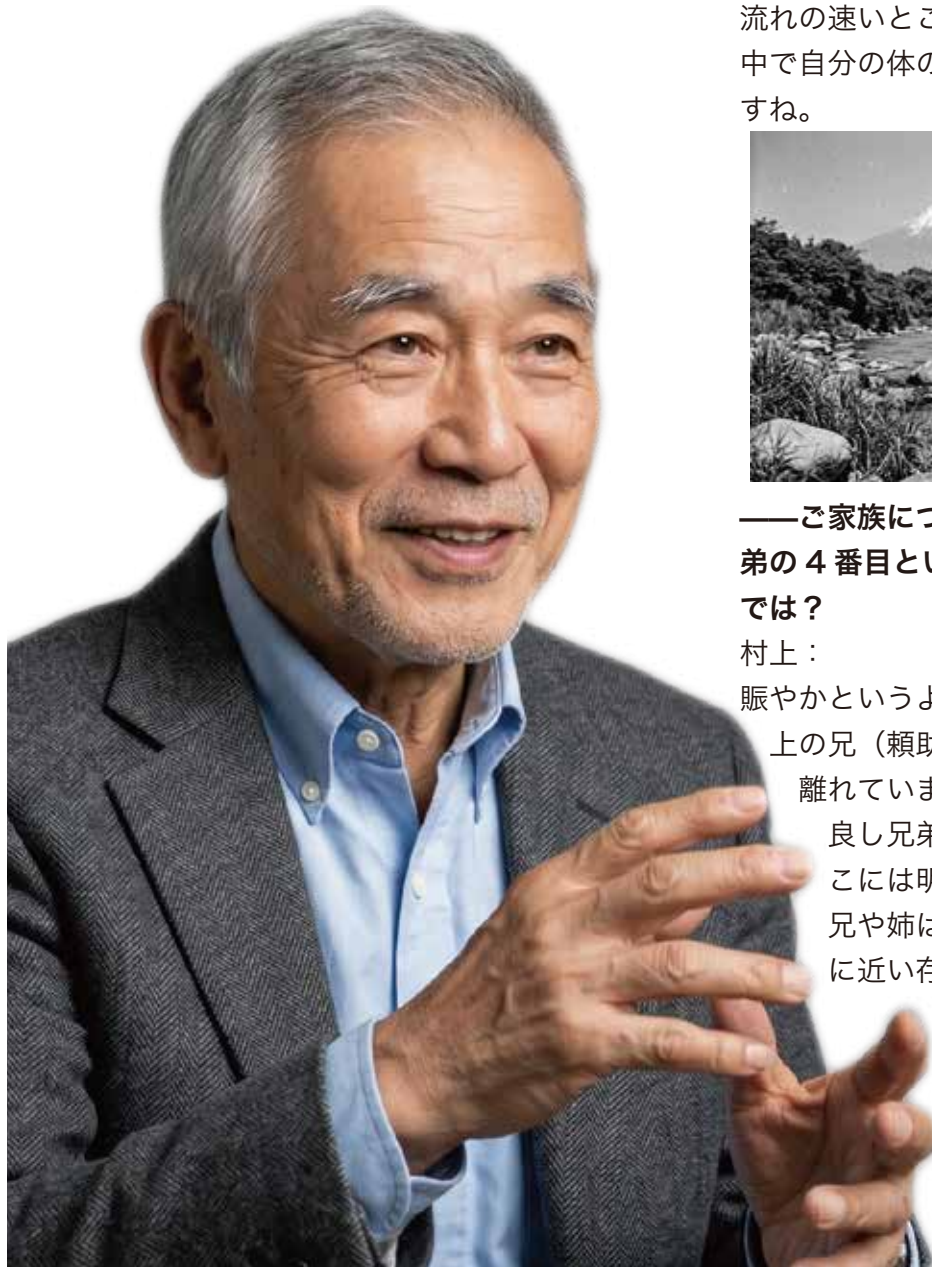


——ご家族についても聞かせてください。5 人兄弟の 4 番目ということで、かなり賑やかだったのでは？

村上：

賑やかというよりは、一つの「社会」でしたね（笑）。

上の兄（頼助）や姉（せつ子、郁子）とは歳が離れていましたから。今の家庭のような「仲良し兄弟」という甘い感じではなくて、そこには明確な「上下関係」がありました。兄や姉は、子供というよりはもう「大人」に近い存在。親に代わって僕を叱ることもあれば、家の中の秩序を守る存在でもありました。逆らうなんてことは考えもしませんでしたね。兄の言うことは絶対。でも、その厳しい上下関係があったからこそ、外に出た時に目上の人を敬うとか、



組織の中での振る舞いというものが自然と身についたんだと思います。

——一方で、弟の栄三さんとは歳が近かったのですね。

村上：

そう、栄三とは年子のような感覚でしたから、あいつは最高の相棒でした。川へ行くのも、後でお話しする山への鳥捕りに行くのも、いつも一緒。兄貴たちには気を使って過ごしていましたが、栄三と二人になると、ようやく子供らしい解放感に浸れたというか。あいつがいなかったら、僕の子供時代はもっと堅苦しいものになっていたかもしれませんね。

——川遊びの他に、夢中になったことはありますか？

村上：

山での「鳥捕り」ですね。これは栄三と一緒によくやりました。ターゲットはメジロ。あの綺麗な鳴き声と鮮やかな緑色の羽に、子供ながらに魅了されてね。

といっても、立派な道具があるわけじゃない。自分たちで「トリモチ」を自作したり、簡易的な罠を仕掛けたりするんです。メジロが好む木の種類を覚えて、静かに待ち伏せする。これがまた、根気がいる作業でね。でも、ようやく罠にかかって、手のひらの中でメジロがバタバタと動いた時のあの心臓の鼓動は、今でも忘れられません。



——自然の厳しさや命の感触を、遊びを通して学んでいたのですね。

村上：

まさにそうです。今の子供たちはスマホで何でも見られますが、僕らは「匂い」や「音」、そして「手触り」で世界を理解していました。山を歩けば、どの木が折れやすいか、どこに蛇がいるか、五感が研ぎ澄まされていく。あの頃の経験が、後に 50 歳で脱サラして「焼き鳥いちばん」を始める時の、

ある種の「度胸」に繋がったような気がします。「あきらめなければ、獲物は必ず罠にかかる」じゃないけれど（笑）。

学生期～打ち込むということ～

——小学校から中学校までの 9 年間、ずっと同じ学区で過ごされたそうですね。村上：

そうなんです。地元の西小学校から西中学校へ、メンバーがほとんど変わらずに持ち上がりでした。これが僕の人生において、どれほど大きな財産になったか。9 年間も毎日顔を合わせていれば、もはや友人というよりは「兄弟」に近い感覚です。近所の連中とは、親の顔も家の事情も全部知っている。隠し事なんてできないけれど、その分、理屈抜きの信頼関係がありました。今でも付き合いがある友人がたくさんいるのは、この裾野の佐野という土地が育んでくれた「濃い絆」のおかげだと思っています。

——中学校では野球部に所属されていたとか。

村上：

ええ、部活は野球一筋でした。正直に言って、チームとしては決して強くはなかったですよ（笑）。でも、取り組む姿勢だけは真剣そのものでした。当時の部活動は今の比じゃないくらい厳しくて、真夏の炎天下で水を飲むことも許されない時代。泥だらけになって白球を追いかけて、声を枯らして。あの時の練習は、技術を磨くというよりは「根性」を叩き込まれる修行のようなものでしたね。



——強くなくても、真剣に打ち込めた理由はどこにあったのでしょうか。

村上：

やっぱり「仲間」がいたからでしょうね。一緒に怒られ、一緒に走り込みをした連中が、さっき言った「家族のような幼馴染」たちだった。あいつらが頑張っているから、自分も負けられない。個人の技術以上に、チームという「和」を大切にすることを、野球から教わりました。試合で負けて悔しくて、みんなで黄瀬川のほとりで暗くなるまで語り合ったことも、今となってはキラキラした思い出です。

——高校は市立沼津高校に進学されました。ここでの3年間は、大きな転機になったのではないですか？

村上：

ええ、まさに。高校生活は僕の人生の「ギア」が一段上がった時期でした。特に忘れられないのが、2年生の時に「自動車部」を創部したことです。今でこそ珍しくないかもしれませんが、当時はまだ車というものが特別な存在で、高校にそんな部活があるなんて極めて稀でした。

——創部、つまりゼロから自分たちで作ったわけですね。

村上：

そうです。幼馴染や気の合う仲間数人と、「自分たちで車をいじりたい」という一心で先生に掛け合いました。最初は遊びの延長のようなものでしたが、放課後の技術室やガレージは、僕らにとって最高の「秘密基地」になりました。ミッションをバラしては組み直し、エンジンから漏れるオイルの匂いにまみれて。あの頃の放課後は、勉強よりもずっと多くのことを学んでいた気がします(笑)。

——当時はどんなことに夢中になっていたのですか？

村上：

構造を理解するのが面白くて仕方がなかった。なぜ、このレバーを動かすと力が伝わるのか。どうすればもっとスムーズにギアが噛み合うのか。教科書に書いてある理論ではなく、実際に手を動か

して、鉄の冷たさや油の粘りを感じながら覚える。充実した時間でしたね。仲間たちと「いつか自分たちが作った車で、この裾野を走れたら最高だな」なんて語り合いながら。

——その経験が、後の関東自動車工業（トヨタ自動車東日本）への入社、さらには「焼き鳥いちばん」での串打ちの技術にも繋がっているように感じます。

村上：

そうかもしれませんね。車も焼き鳥も、実は根底にあるのは「構造」と「丁寧な仕事」だと思うんです。一つの部品の狂いが全体の走りを変えるように、一串の刺し方が焼き上がりを左右する。高校時代のあの放課後、夢中になってエンジンをいじっていた時間は、単なる趣味ではなく、私の「ものづくり」に対する情熱の産声だったんだと思います。あの時、何もないところから部活を作ったという自信が、後の50歳での脱サラ開業という、もう一つの大きな「創部」へと私を突き動かしたのかもしれません。



村上俊治物語②

学び、伝える、つなぐ、ということ



高校を卒業し、

関東自動車工業株式会社へ入社

さまざまな学びを経て

妻と出会い、子を授かる

一人前の男になる道のり

青年期～プロになる過程～

——1965 年、18 歳で関東自動車工業に入社されました。高校の「自動車部」で培った自信を持つての門出だったかと思いますが、実際の現場はいかがでしたか？

村上：

一言で言えば「洗礼」でしたね。高校の部活でエンジンをいじっていたのとは、次元が違いました。入社して配属された現場は、まさに戦場のような活気と、一分の隙も許されない緊張感に満ちていました。当時の日本は高度経済成長の真っ只中。工場全体が「より良い車を、より早く、世界へ」という巨大な熱量に突き動かされているようでした。

一番驚いたのは、今では世界的に有名になった「トヨタ生産方式（TPS）」の考え方が、現場の隅々にまで浸透し始めていたことです。当時はまだ「黎明期」と言える頃でしたが、先輩たちが口を酸っぱくして言っていたのは「後工程はお客様だ」という言葉でした。自分が担当するネジ一本の締め忘れが、ラインの先で待つ仲間に迷惑をかけ、最



——「黎明期の TPS」を現場で体験されていたのですね。特に印象に残っている「仕事の哲学」はありますか？

村上：

やはり「カイゼン」と「アンドン」ですね。ラインの横に紐（アンドン）が垂れ下がっていて、何か異常があれば新入社員だろうが誰だろうが、それを引いてラインを止めてもいい。最初は「自分がラインを止めたら、どれだけの損失が出るのか」と怖くて引けませんでした。しかし、上司はこう言いました。「悪いものを先に流すことの方が、会社にとっては大きな罪なんだ」と。

「問題を隠さず、全員で見える化し、知恵を出し合って直していく」。この徹底した姿勢に、ものづくりの真髄を見ました。高校時代、自動車部でミッションを組んでいた時は「動けばいい」という遊びの

延長でしたが、プロの世界では「完璧であって当たり前、その上でどう効率化するか」が問われる。毎日が自分との戦いでしたし、同時に、チームで一つの完璧な製品を作り上げる喜びを、皮膚感覚で覚えていった時期でもあります。

——そうした厳しい現場で、若き日の村上さんを支えていたものは何だったのでしょうか。

村上：

22 歳で結婚した妻・文乃の存在ですね。実は彼女とは、職場の先輩の紹介、いわゆる「お見合い」で出会ったんです。当時はまだ恋愛結婚よりもお見合いが当たり前の時代でしたし、何より私は毎日油にまみれて仕事ばかりで、女性と出会う機会なんてありませんでしたから。



ある日、普段から目をかけてくれていた職長が「真面目に働くお前に、ぴったりのしっかりした娘がいる」と写真を持ってきてくれてね。初めて会った時の文乃は、とても控えめで静かな女性でしたが、言葉の端々に芯の強さを感じました。

当時の男は「家庭を持って初めて一人前」という気風がありましたし、何より、彼女の落ち着いた佇まいを見た時、「この人となら、これからの激動の時代を共に真っ直ぐ歩いていける」と直感したんです。

朝早く家を出て夜遅くに帰ってくる私を、彼女はいつも温かい食事と共に迎えてくれました。文乃という揺るぎない「心の港」ができたことで、私はより一層、仕事に打ち込むことができたんです。

——「仕事」と「私生活」、その両方のギアが噛み合ったことで、村上さんの人生が加速していったのですね。

村上：

その通りです。関東自動車工業での若手時代に学んだ「現状に満足せず、常に一步先を面白くする(改善する)」という哲学は、後の人生のあらゆる場面で私の背骨となりました。一見、単調に見えるライン作業の中にも、昨日より今日、今日より明日を良くする工夫は必ずある。高杉晋作の「面白きこともなき世を面白く」という言葉は、実はこの鉄と汗にまみれた工場の喧騒の中で、最もリアルな響きを持って私の中に根付いたのかもしれない。

子育て期～守り伝える側に～

——20代後半から30代にかけては、職場でも中堅として後輩を指導する立場になられたかと思えます。教える側になって、仕事への向き合い方は変わりましたか？

村上：

大きく変わりましたね。自分ひとりが良い仕事をするのと、人に「なぜこの作業が必要なのか」を理解させて動かしてもらうのは、全く別の技術でした。若い頃は、不良品を出したラインのミスを見ると「なんでこんな簡単なことができないんだ」と腹を立ててしまうこともありました。

でも、かつて自分が先輩に教わった「トヨタ生産方式」の本質を思い出したんです。「人を責めるな、仕組みを責めよ」と。ミスが起きたのは、その人間のやる気がないからではなく、ミスが起きやすい工程になっているからだ。そう考えるようになってからは、後輩の話に耳を傾け、一緒に現場の「改

善」を考えるようになりました。兄に厳しく育てられた反動もあったのか、私は頭ごなしに怒るのではなく、「背中を見せて、共に考える」職長でありたいと思っていました。

——仕事で重責を担う一方で、プライベートでは3人のお子さんに恵まれます。

村上：

家の中はもう、毎日が運動会のような騒ぎでしたよ（笑）。

当時は今のように「ワークライフバランス」なんて言葉はない時代。私は残業続きで、子供の寝顔しか見られない日も珍しくありませんでした。

それでも、かつて自分がしたように川や山へ連れ出したりするのは、私にとって最高の息抜きでした。文乃は、私が仕事に専念できるよう、家事も育児も一切の弱音を吐かずに守り抜いてくれました。彼女には一生頭が上がりません。



——そして33歳の時（1980年）、裾野市内に念願のマイホームを新築されます。これは村上さんにとって、一つの大きな節目だったのではないのでしょうか。

村上：

ええ。18歳で実家を出て働き始め、「いつか自分の力で家族の城を築くんだ」という目標が形になった瞬間でした。新築の家の匂い、自分の稼ぎで買った柱の感触。鍵を開けて、文乃と子供たちと一緒に真新しいリビングに入った時のことは、今でも鮮明に覚えています。

家を建てる場所は、やっぱり富士山が見える裾野以外には考えられませんでした。新しい家の窓から、子供の頃からずっと見てきた富士の山容が見えた時、「ああ、俺もようやくここまで来たんだな」と、胸の奥から熱いものが込み上げてきました。厳しい工場での日々も、手油にまみれた時間も、すべてはこの景色を見るためにあったのだと。あの窓から見た富士山は、私の人生の中で一番美しく見えましたね。

村上俊治物語③

面白き こともなき世を 面白く



永年の夢を叶えるため

一念発起して早期退職

念願の焼き鳥屋を、夫婦二人三脚で切り盛り

がんと闘い、その中で得たこと

転機 ～一念発起して独立～

——1997年、50歳という節目で関東自動車工業を早期退職されます。役職もつき、安定した生活があった中で、なぜ大きな決断をされたのでしょうか。

村上：

周りからはずいぶん反対されましたよ。「あと10年で定年なのに、もったいない」「今の時代に脱サラなんて無謀だ」とね。でも、50歳を前にして自分の人生を振り返った時、ふと「俺の『面白きこと』は、これで完成でいいのか?」と思ったんです。車づくりには強い誇りを持っていましたが、自分が手掛けたものが誰の手に渡り、どんな笑顔を作っているのか、直接見ることは難しい。お客様の顔を直接見て、自分の手で喜ばせたい。その想いが日に日に強くなっていったんです。

——そこで選んだのが「焼き鳥屋」だったのですね。

村上：

ええ。若い頃、工場の激務の帰りに職場の仲間とよく通った焼き鳥の屋台があってね。煙だらけになりながら、安い串を頬張って、仕事の愚痴や将来の夢を語り合った。あの赤提灯の下には、男たちの明日への活力が詰まっていた。「いつか自分も、誰かの心を温めるような、あんな場所を作りたい」と、心のどこかでずっと憧れていたんです。



——奥様の文乃さんは、その決断をどう受け止めたのでしょうか。

村上：

妻には本当に苦勞をかけました。ある夜、思い切っ

て「会社を辞めて、焼き鳥屋をやろうと思う」と打ち明けた時、彼女は少し驚いた顔をしましたが、すぐに「あなたがずっと考えて決めたことなら、やりなさい。私も家庭料理くらいは作るから」と言ってくれたんです。その言葉を聞いた時、涙が出るほどありがたかった。彼女の覚悟がなければ、「焼き鳥いちばん」は生まれていません。

——念願の開業を果たして、順風満帆なスタートだったのですか？

村上：

とんでもない（笑）。開業当初は閑古鳥が鳴いていましたよ。車の部品の構造は熟知していても、鶏肉の筋一つ、炭火の温度一つ、まるで勝手が違う。串打ちも不格好で、焦がしては捨てる毎日。不安で眠れない夜が続きました。

でも、あの工場時代に叩き込まれた「改善」の精神がここで生きたんです。なぜパサつくのか、どの炭の配置が均一に焼けるのか。毎日ノートに記録し、試行錯誤を繰り返しました。妻も毎日店に立ち、持ち前の笑顔でお客様に接してくれました。

——軌道に乗るまでの原動力は何だったのでしょうか。

村上：

「一人でかなえられる夢はない」という実感です。妻の支えはもちろん、かつての職場の仲間たちが「村上の店だ」と毎晩のように顔を出してくれた。美味いと言って食べてくれる彼らの笑顔を見た時、「ああ、間違っていなかった」と心の底から思えました。

少しずつ地元の人たちの口コミも広がり、常連さんが増えていきました。車づくりも焼き鳥も、結局は「丁寧な仕事」と「人への思いやり」。高校時代に自動車部を作ったのと同じです。50歳からの挑戦は、これまでの私の人生すべてが繋がった、最高の「創部」だったんです。

発症 ～闘病生活～

——50歳で開業した「焼き鳥いちばん」は、村上さんと文乃さんの努力で地元になくってはならない店になりました。しかし、71歳の時(2018年)、思わぬ試練が訪れます。



ええ。最初はただの風邪か、長年吸い込んできた炭の煙で喉をやられただけだと思っていました。声がかすれる状態が何ヶ月も続いて、妻に背中を押されるようにして病院へ行っただけです。そこで告げられたのが「喉頭がん」でした。

自動車工場で働いていた頃も、店を立ち上げた時も、どんな困難も「自分の工夫と根性」で乗り越えてきた自負がありました。でも、病氣ばかりはどうにもならない。告知を受けた日は、頭の中が真っ白になって、どうやって家まで帰ったのか覚えていません。

——そこから、放射線と抗がん剤による過酷な治療が始まりました。

村上：

想像を絶する苦しさでした。喉を焼かれるような痛みが続き、食べ物の味がまったく分からなくなる。大好きな寿司はおろか、水さえ喉を通らない時期もありました。体重も一気に落ちて、「俺の人生もここまでか」と弱音を吐いた夜もありました。でも、そんな私を絶望の淵から引き戻してくれたのが、やっぱり家族でした。妻の文乃は毎日、少しでも喉を通りやすいようにと工夫してスープを作ってくれました。独立した子供たちや孫たちも、ひっきりなしに顔を見せに来てくれてね。病室のベッドで天井を見上げながら、「もう一度、あいつらのために焼き台の前に立ちたい」「お客さんの顔を見たい」という執念だけが、私の中で赤々と燃え続けていたんです。

——その甲斐あって、2020年には治療を終え、一度は店に復帰されましたね。しかし翌年、がんが再発してしまいます。

村上：

あの時はさすがに目の前が暗くなりました。「あんなに苦しい思いをしたのに」と。医師からは、命を守るために喉頭の摘出手術を提案されました。全摘出となれば、声を完全に失うことになります。それは私にとって、死ぬことよりも辛い選択に思えました。店に来てくれる常連さんの「大将、今日も美味しいよ」という声に、「ありがとう！」と自分の声で返せない。そんな焼き鳥屋に、何の意味があるのかと。

——苦渋の決断だったと思いますが、そこで村上さんは「半分の摘出」を選択されます。

村上：

はい。リスクは高くなるかもしれないし、元通りの声が出るわけでもない。それでも、お客さんとの「繋がり」である声帯を、少しでも残したかったんです。家族も私のわがままを理解し、背中を押してくれました。「お父さんらしいね」って。2022年に喉頭部分切除の手術を受けました。「絶対にまた店で『いらっしゃい』と言うんだ」と心に決めていましたから、不思議と心は折れませんでした。

——そして現在、ふたたび「焼き鳥いちばん」のカウンターに立たれています。

村上：

以前のように、店の外まで響くような威勢のいい声は出せません。こんな風に、かすれた小さな声になってしまいました。でも、久しぶりに店を開けた日、常連さんたちが「大将、声にハクが出たな！」「元気そうでよかった」と笑って迎えてくれたんです。

声が変わっても、魂は焦がさない。言葉が少なくなった分、一本一本の串に前よりもずっと深い感謝を込めて焼けるようになりました。がんになったことは大きな試練でしたが、自分がどれほど人に恵まれ、生かされているかを教えてくれた、人生の「再確認」の時間だったと、今はそう思っています。

夫へ、父へ、家族からのメッセー



「誰よりも頑固で

誰よりも優しい人へ」

お見合いで出会ってから五十年以上。自動車工場で油にまみれて帰ってくる日も、50歳で突然「焼き鳥屋をやる」と言い出した日も、あなたはいつも真つ直ぐで、少し頑固でしたね。

でも、その頑固さは「家族を守る」

「お客さんを笑顔にする」という

強い思いの裏返しだと、私はずつと知っていました。喉の病気で倒れた時、声を失うかもしれない恐怖の中で、あなたが一番に心配していたのは「店を待っていてくれる人のこと」でしたね。

少し声はかすれてしまったけれど、今のあなたの声が、私は一番好きです。これからも無理だけではないで、一緒に長生きしましょうね。(文乃)

「ずっと追いかけてきた

親父の背中」

昔から、親父の背中は大きくて、

いつも何かと戦っているように見え

ました。工場時代の油の匂いが染み付いた背中も、今は炭の香りがする背中も、僕の誇りです。病気を乗り越えて再び焼き台に立つ親父を見て、「やっぱりこの人には敵わないな」と痛感しました。たまには店を休んで、また孫たちの野球の相手をしてよ。(俊一)

「世界で一番温かい

無口な焼き鳥」

小さい頃は、厳しくて少し怖いお父さんでした。でも、私が悩んでいる時、何も言わずにただ黙って好物のネギマを焼いてくれたこと、ずつと覚えています。病気の後、言葉数が少なくなった分、もつと温かい味がある気がします。これからも、私たち家族の大黒柱でいてね。

「終わらない『改善』を

尊敬しています」

70歳を過ぎても、「もつと美味

く焼けるはずだ」と毎日ノートを付けて炭の置き方を工夫している親父。その終わらない「改善」の姿勢は、車を作っていた頃から全く変わっていませんね。僕も仕事で壁にぶつかった時、親父の不屈の精神を思い出して奮い立っています。これからも焼き鳥、食べさせていただきます。(良二)



特集 まちの元気を取り戻すために



——50歳で「焼き鳥いちばん」を開業し、ご自身のお店を軌道に乗せるだけでも大変だったかと思います。そこから、地域の活動、特に商店会長を引き受けることになったのはなぜですか？

村上：

最初の数年は、確かに自分の店を回すだけで精一杯でした。毎日串を打って、煙にまみれて、その日の売上に一喜一憂してね。でも、店が少しずつ軌道に乗ってきて、ふと店の外に目を向けた時、かつて自分が子供の頃に見ていた地元の商店街の活気が、少しずつ失われていることに気がついたんです。

シャッターが閉まったままの店がポツポツと増え始め、夜になれば通り全体が暗く沈んで見える。自動車工場で働いていた頃、「一つの工程の滞りが、全体の流れを悪くする」と叩き込まれました。このままでは、自分の店だけが流行っていても、いずれこの街全体が沈んでしまう。そう感じた矢先に、先輩の店主たちから「若い力（といっても当時はもう50代半ばでしたが）で、商店会を引っ張ってくれないか」と声をかけられたんです。

——会長になって、最初に取り組んだことは何だったのでしょうか。

村上：

まずは、現場の「見える化」と「意識改革」です。工場時代の「カイゼン」を商店街に持ち込んだわけですね（笑）。商店主というのは、良くも悪くも一国一城の主ですから、最初は足並みを揃えるのが本当に大変でした。「今さら何をやっても無駄だ」と諦め顔の人も多かった。

だから私は、理屈を並べるのではなく、まずは自分の店の周りから徹底的に掃除を始めました。そして、夕方になれば他の店より少し早く「赤提灯」に明かりを灯すようにしたんです。通りに一つでも明るい温かな光があれば、人の足は自然と向くものです。「いちばんの親父がまた何かやってるぞ」と、最初は遠巻きに見ていた周りの店主たちも、少しずつ掃除を手伝ってくれたり、店先の照明を明るくしてくれたりするようになりました。

——リーダーシップが少しずつ波及していったのですね。

「お祭りは人の笑顔が溢れます」



村上：

ええ。それから、夏には商店街全体で「夜市」を企画しました。金魚すくいや輪投げの屋台を出して、うちの店は店の外に焼き台を出して、道行く人に焼き鳥を振る舞いました。普段は車で大型スーパーに行ってしまうような若い家族連れが、浴衣姿で歩いてくれるのを見た時、商店街の仲間たちと一緒にビールで乾杯したあのビールの味は、本当に格別でしたね。

店は自分の「城」ですが、商店街はみんなの「庭」なんです。庭が荒れていたら、いくら城が立派でも人は来てくれません。会長としての数年間は、自分一人の夢を追うのとは違う、地域という「大きな家族」をどう盛り上げるかを考え抜いた、熱く濃密な時間でした。

——地域のお祭りと言えば、裾野市中央公園で開かれる「みどりまつり」での出店も、村上さんにとって大切な思い出そうですね。

村上：

そうですね。「みどりまつり」は、私にとっても、

うちの家族にとっても、一年で一番大きな行事と言っても過言ではありませんでした。ご存知の通り、あそこには名勝「五竜の滝」があって、春から初夏にかけては本当に緑が美しく、マイナスイオンに溢れている素晴らしい場所です。

普段は自分の小さな店の中で焼いていますが、あの日ばかりは違います。機材を全部トラックに積み込んで、公園の青空の下にテントを張る。清々しい風の中で火を起こし、炭を熾（おこ）す。滝のゴォーッという音をBGMにしながら串を焼くのは、最高に気持ちが良いんですよ。子供の頃、黄瀬川で真っ暗になるまで遊んでいたあの自然の中での高揚感が、大人になってから蘇ってくるような感覚でした。

——野外での大量の仕込みと調理は、体力的にかなりハードだったのではないですか？

村上：

それはもう、とんでもない重労働ですよ（笑）。何千本という串を前日から家族総出で仕込みますからね。当日は息つく暇もありません。でも、煙の

匂いにつられて、公園で遊んでいた子供たちが小銭を握りしめて買いに来てくれる。「おじちゃん、美味しい！」って笑顔で言ってくれる。その瞬間に、疲れなんて全部吹き飛んでしまうんです。

私一人や妻だけでは到底回しきれませんから、独立した子供たちも孫を連れて手伝いに来てくれました。長男が注文を取り、次男が焼きを手伝い、長女がお客さんに手渡す。孫たちは公園を走り回っている。あの「みどりまつり」の屋台は、村上家が一つのチームとして機能する、年に一度の「家族の祭典」でもありました。

——ご自身の病気を乗り越えられた後も、出店は続けられたのですか？

村上：

ええ。声が出にくくなってからも、できる限り顔を出すようにしています。がんになった時、店を長く休んでしまいましたが、その間も地元の皆さんが「親父さん、待ってるよ」と励ましの言葉をかけ続けてくれました。私にとって、お祭りで屋台を出すことは、商売というよりも「私は元気に

やっていますよ、皆さんのおかげですよ」という、地域への『恩返し』のようなものなんです。

——村上さんにとって、この裾野の地域社会とはどのような存在ですか。

村上：

「土壌」ですね。私が50歳で蒔いた「焼き鳥いちばん」という小さな種が、枯れずにここまで育つことができたのは、裾野という温かく、時には厳しく見守ってくれる地域社会という土壌があったからです。

座右の銘である「面白きこともなき世を面白く」という言葉。若い頃は、自分の人生をどう切り拓くかという「個人の挑戦」の意味で捉えていました。でも今は違います。自分が打った一本の串が、商店街の灯りを少しだけ明るくし、祭りの日に子供の笑顔を作る。自分自身だけでなく、「自分の周りの世界」を少しだけ面白く、温かくすること。それこそが、この街に育ててもらった私の、これからの使命だと思っています。



残したい想い 次世代へ贈る、炭火



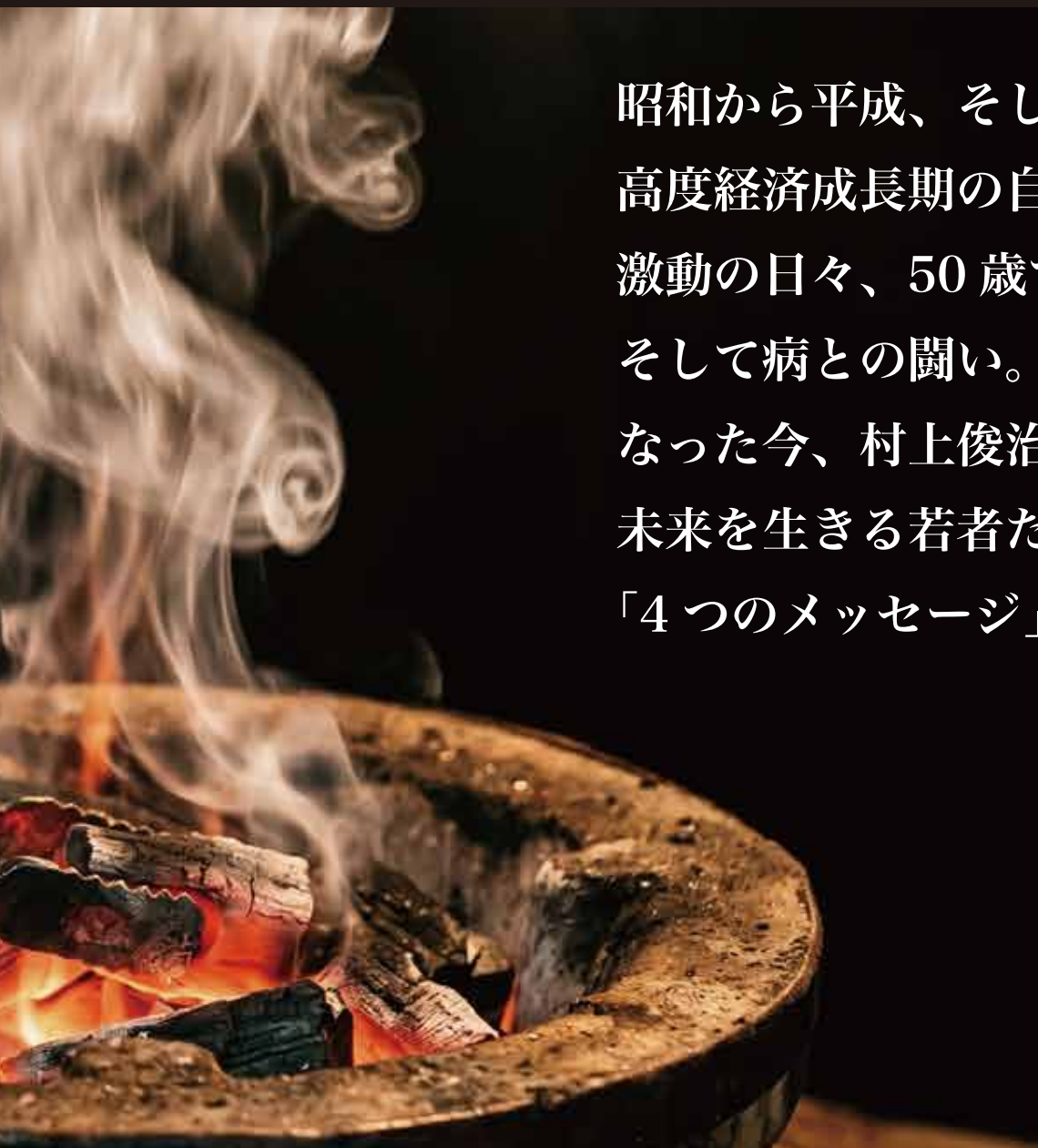
1. 一人でかなえられる夢はない

若い頃は、自分の腕ひとつで道を切り拓けると思っていました。高校で自動車部を作った時も、50歳で脱サラして「焼き鳥いちばん」を開業した時も、どこか「自分がやってやる」という強い自負があったのも事実です。しかし、振り返ってみれば、そこには常に私を支えてくれる人たちの存在がありました。

工場時代、毎晩遅く帰る私を温かいご飯を作って待っていてくれた妻の文乃。店の開業時、煙にまみれて不格好な串を焼く私を励まし、足繁く通ってくれたかつての同僚たち。そして、がんになり声を失いかけた時、「大将の味が食べたい」と復帰を待っていてくれた常連さんや、背中をさすってくれた家族。

どんなに強い思いがあっても、たった一人で完結する夢はありません。まずは一番近くにいる家族や友人の理解と協力を得ること。そして、自分も誰かの夢を支える存在になること。人との繋がりこそが、夢を形にする唯一の土台なのです。

のように温かく決して消えない「志」



昭和から平成、そして令和へ。
高度経済成長期の自動車工場での
激動の日々、50 歳での起業、
そして病との闘い。70 代後半と
なった今、村上俊治がこれからの
未来を生きる若者たちに残したい
「4 つのメッセージ」。

2. 「面白きこともなき世を面白く」の本当の意味

私の座右の銘ですが、これは単に「楽しいことを見つけて遊ぼう」という意味ではありません。人生には、単調で面白みを感じない時間や、逃げ出したくなるような苦しい時間が必ずあります。工場のライン作業の反復や、毎日何百本と冷たい肉に串を打つ仕込みの時間は、決して華やかなものではありません。

しかし、その「面白くない時間」をどう面白くするかは、自分自身の心一つで決まります。「どうすれば昨日より 1 秒早く串が打てるか」「炭の配置をどう変えればもっと肉汁を閉じ込められるか」。そこに小さな工夫の種を見つけた瞬間、退屈な作業は「自分だけの挑戦」に変わります。環境のせいにするのではなく、自分の心の持ち方次第で、どんな状況でも人生は面白くできる。それを忘れないでください。

3. 失敗や挫折は、人生の「カイゼン」の合図

長い人生、必ず壁にぶつかります。私自身、開業当初は閑古鳥が鳴き、毎日捨てられる焦げた焼き鳥を見て途方に暮れました。70代でがんになり、声の半分を失った時は、さすがに「もうこれで終わりか」と天を仰ぎました。

しかし、失敗も病気も、実は人生からの「カイゼン（改善）」の合図に過ぎないのだと今は思えます。やり方が間違っているなら、記録をつけて検証し、工夫すればいい。声が出なくなったなら、その分、一本の串に込める想いを強くし、最高の笑顔で接客すればいい。「あきらめなければ夢はかなう」というのは、決して精神論ではなく、「やり方を改善し続ければ、必ず道は開ける」という事実なのです。立ち止まってもいい。ただ、考えることと工夫することだけは、決してあきらめないでほしいと思います。

4. 目の前の人を大切にすることが、自分のいい人生をつくる

最後に、若い世代の皆さんに伝えたいことです。大きな偉業を成し遂げたり、世界を変えたりする必要はありません。どうか、あなたの「目の前にいる人」を大切にしてください。

私は、焼き鳥という小さな商売を通じて、毎日カウンター越しに会うお客さんの笑顔を作ることだけを考えてきました。すると不思議なことに、その小さな笑顔の連鎖が、巡り巡って私の人生を最高に豊かで温かいものにしてくれたのです。

人に頼られる存在になること。誰かのために、自分の得意なことで汗を流すこと。その地道な積み重ねが、やがて太い幹となり、あなた自身の「いい人生」という美しい花を咲かせてくれるはずです。焦らず、腐らず、目の前の炭火のように、じっくりと温かい火を心に燃やし続けてください。





最愛の家族へ

俺の人生は、決して器用なものではありませんでした。

特別な才能があつたわけでもなく、ただ目の前の鉄を叩き、目の前の鶏肉に串を打ち、そして何より、目の前の「家族」を不器用なりに愛し抜いた人生だつたと思います。

文乃へ。

お見合いで結ばれてから、本当に色々なことがあつたな。朝から晩まで工場で働きづめで、家のことは全て任せきりだつた若い頃。そして、30歳を前にして「会社を辞めて焼き鳥屋をやる」と言い出した時、お前は文句ひとつ言わず「一緒に焼くから」と背中を押してくれた。あの言葉がなければ、今の俺はない。がんになつて声が出なくなつた時も、毎日工夫して飯を作ってくれたな。文乃が隣で笑っていてくれるだけで、俺はどんな困

難も乗り越えられた。本当にありがとう。

俊一、良美、良二へ。

お前たちが小さい頃は仕事ばかりで、まともに遊んでやる時間もなかつた父親だつたと思う。それでも、三人ともそれぞれに立派な家庭を築いてくれた。「みどりまつり」の時なんかは、家族総出で手伝つてくれて、親父は本当に鼻が高かつたよ。俺は言葉で愛情を伝えるのは苦手だけれど、お前たちが俺の焼いた串を美味しそうに頬張る顔を見るのが、何よりの幸せだつた。これからは、自分たちの家族を一番大切にして、それぞれの「面白き人生」を歩んでいってくれ。いつでも、いちばんのカウンターで待つてゐるぞ。

孫たちへ。

じいじにとつて、お前たち七

人は文字通り「七つの宝物」だ。店に来て「じいじの焼き鳥、最高!」と言ってくれるその声を聞きたびに、生きる力が湧いてくるんだよ。声が小さくなつてしまつて、昔みたいに大声で笑うことは難しくなつたけれど、じいじはお前たちの成長を見るのが本当に楽しみだ。これから先、壁にぶつかることもあるだろう。そんな時は、いつでも顔を見において。

お前たちという最高の家族に恵まれた俺は、間違いなく世界一幸せな男だ。俺の「ものがたり」は、お前たち家族の支えなしには一ページも書けなかつた。

今まで本当にありがとう。そして、これから、この面白き人生を味わい尽くそう。

村上 俊治

村上俊治物語



発行日	令和8年5月
発行	株式会社ものがたり
	〒410-1123 静岡県裾野市伊豆島田
発行人	賀茂博美